キズナエピソード

丘田マリアンヌ　3話

１２３４５６７８９０１２３４５６７８９０１２３４５６

//ヴィジュアルノベル形式開始

//とびお自室

その日は、同人誌即売会の前日だった。

残っている作業は、コピー紙による製本作業。

その作業は広い俺の家でやる方が向いていたので、

俺はマリアンヌと手伝いのりりを部屋に招き入れていた。

そうして1日かけてあらかた終わった頃、

あとは細かい作業だけとなった――。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//ADV形式開始

［りり］

「んー。まぁこんなもんでしょ」

［マリアンヌ」

「りりちゃん、ありがとう。助かったっス」

［りり］

「じゃあ、アタシはそろそろ時間だから帰るね。

おつかれちゃ～ん。

とびお、玄関まで見送ってよ」

［とびお］

りりが自分の荷物を取って立ち上がる。

玄関まで見送り？

不思議に思ったものの、俺は従うことにした。

//暗転

//とびおの家・玄関

［とびお］

「今日はありがとな」

［りり］

「なに、いまさらかしこまってんの、まじウケる。

って言うか、今まではマリ夫の手伝いって

アタシだけだったからさ、とびおがいて助かったよ」

［りり］

「あ、そうそう。

とびお、ちょっと来て」

［とびお］

りりが頭を寄せるように言う。

俺がそれに従うと、りりは小声で話しかけてきた。

［りり］

「いい？　マリ夫は自分からは絶対言わないから。

男なら、お前からけじめつけろよ？」

［とびお］

「けじめ……って、どういうことだよ」

［りり］

「そういうことだよ。それじゃーねー」

［とびお］

そう言うと、りりはケラケラ笑いながら帰っていった。

男なら、けじめをつけろって……。

それって、つまり……。

［マリアンヌ］

「とびおくーん。

これ、手伝ってくれないっスかー？」

［とびお］

部屋からマリアンヌが呼んでいる。

そうだ。

今は作業を終わらせることに集中しないと。

//暗転

//とびお自室

［とびお］

そうして、俺は部屋に戻ると、

何事もなかったかのように手伝いを再開する。

その作業は、外がうっすら明るくなるまで続いた。

［とびお］

その間、俺の頭はマリアンヌのことでいっぱいだった。

//暗転

［とびお］

明け方近くになり、

俺はマリアンヌにコーヒーを淹れて持っていった。

［マリアンヌ］

「おぉぉーここで、カフェインキター。

マジ神っス！ありがたいっスー！」

[とびお]

「お疲れ。

なんとか間に合ったな」

[マリアンヌ]

「い、いやはや…

と、とびおくんとりりちゃんの友情パワーがなければ、

き、きっと間に合ってなかったっスよ」

[とびお]

「今回の新作も、イイ感じに仕上がったな？

やっぱマリアンヌにしか描けないよ、こういう作風って」

[マリアンヌ]

「そ、そうっスか……？　なんか恥ずかしいっスね？

でも、とびおくんにそう言われると自信になるっスよ」

[とびお]

「文化祭に出してた作品もそうだったけどさ、

なんていうか、不思議な世界観が広がってるって

いうか……だから、俺……」

[とびお]

「……好きなんだ」

[マリアンヌ]

「……ふぇっ⁉」

[とびお]

「マリアンヌの描いた作品……」

[マリアンヌ]

「あ、あぁ～～！　いやハハ～、

て、てててて、照れるっスよ～～！

な、なんかもう……ただただ恐縮しかないっス！」

［とびお］

何を遠回しな言い方してるんだ俺は……。

確かに文化祭でマリアンヌの作品を目にした時、

不思議なくらいに心惹かれる想いがした。

[とびお]

だけど、今、俺が本当に心惹かれてるのは、

『自分の頭の中にある世界を形にしたい』

そんな夢に、ひたむきに向き合っている……

[とびお]

「なぁ、マリアンヌ……」

[マリアンヌ]

「なんスか？」

［とびお］

「俺、マリアンヌのことが好きなんだ。

だからその……付き合わない……か？」

［とびお］

面と向かうのが恥ずかしく、

コーヒーを飲みながら、

精一杯さり気なく言ったつもりだった。

［とびお］

だが、返事がない。

……やってしまったか……？

［とびお］

恐る恐るマリアンヌの顔を覗き込む。

すると彼女は、初めて会ったあの日のように、

顔を真っ赤にして俺を見つめていた。

［とびお］

「えーと……ど、どうかな？」

[マリアンヌ]

「い、いつ……フラグが立ってたんスか⁉」

[とびお]

「え？　フラグ？　何のことだ⁉」

［マリアンヌ］

「ぼ、僕なんかで、いいんスか？

こ、こんな腐女子を捕まえておいて、徐々に

自分好みに育成しようとかそういう魂胆っスか？」

［とびお］

「何言ってんだよ、今のままのマリアンヌがいいんだって」

［マリアンヌ］

「今のままの僕……？　こ、このままで……⁉

う、嬉しいっス！　あ、あの……実は……

とびおくんのこと、ずっとずっと前から大好きで……」

[マリアンヌ]

「で、でも、どんな属性キャラの女の子が

とびおくんの好みかわからなくて……！

だから……えっと……あの……！」

［マリアンヌ］

「おお、男の人と付き合うなんて、

何からどうしたらいいのかわからぬ、ふ……不束者ですが

よろしくお願いしたいっス……！」

［とびお］

「大袈裟だな。まぁ、付き合うって言っても、

今までずっと一緒に居たし

そんなに何も変わらないさ」

［マリアンヌ］

「デュフフ、そう言ってもらえると、安心するっス」

※◆R18版、ここでRシーン挿入

［とびお］

そうして、俺達は笑いあい――

昔好きだった漫画やアニメの話に花を咲かせた後、

気付けば深い眠りに落ちていた。

//暗転

//ADV形式終了

//ヴィジュアルノベル形式開始

目が覚めたのは十時過ぎ。

コミケイベントはすでに始まってしまっている。

焦った俺たちは、慌ててタクシーで会場に向かい、

なんとか午後からの出店には間に合うことができた。

イベントの成果は、予想をはるかに上回る大盛況。

気が付けば、俺たちのブースの前は長蛇の列。

マリアンヌの漫画は、飛ぶように売れ、あっという間に完売となった。

「す、すごい……っス！

こ、こんな売れ方したの初めてっスよ！」

「やったな！　努力の成果だよ！」

俺とマリアンヌが互いに手を取って喜び合う。

と、そこへ、一人のスーツを着た男性が声を掛けてきた。

「あの……。実は、私、

こういう出版社で編集をやっているのですが」

「あひる書房？」

渡された名刺には、小規模ながら児童書などを出している

出版社の社名が記されていた。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//3話終了